

山口孤剣

下関市  
(1883～1920)



【著作】  
『階級闘争史論』（大正9・大鑑閣）  
『明治文学全集』第83（昭和40・筑摩書房）ほか  
【閲覧情報】  
下関市立中央図書館・下関市立長府図書館

熱血・熱涙の詩人、評論家、山口孤剣は、明治十六年（一八八三）四月十九日、赤間関区（現・下関市）豊前田町に、呉服商の福田伊助・チヨの三男として生まれた。本名義三。後に、同じ豊前田町の祖母山口家の養子となり家督を継ぎ、山口姓となる。彼は、十七歳の時、県立豊浦中学校を中退。のち上京して松本君平主宰の東京政治学校へ入学、その頃から大逆事件で知られる幸徳秋水、社会主義者片山潜、堺利彦（枯川）らと交わって、しだいに熱烈な社会主義者への傾斜を強めていった。

明治三十五年頃から、彼は東京を舞台に、社会主義運動の実践者として活躍を始めるが、官憲のきびしい弾圧を受ける。そうした状況の中にも恵まれた文才によって『破帝国主義論』を出版。また『平民新聞』紙上にも活発な文筆活動を展開する。

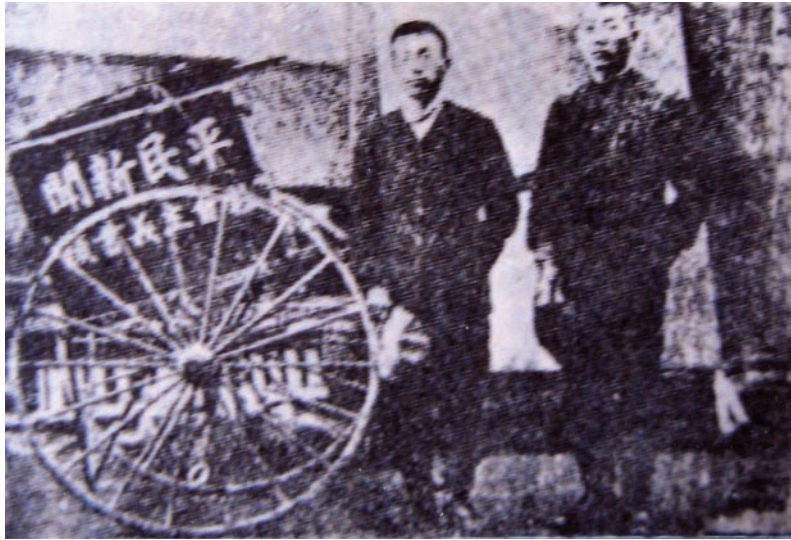
明治三十七年（一九〇四）、小田頼造（佐波郡徳地町）とともに、社会主義伝道行商に出発、約四か月かけて東海道、山陽道を経て下関で終るという実践活動を展開し、試練の道を走破した。翌年、「凶徒聚集事件」で拘引投獄されるが、その後も入出獄を繰り返しながらも、強靱な精神で文筆活動を続けた。

明治末年から大正初期、孤剣は、『週刊サンデー』や『大阪朝日新聞』の記者となり、ジャーナリストとして活躍した。しかしながら、彼はしだいに健康を害し、妻コウの郷里愛媛県宇和島に移り、療養（腎臓病）に専念したが、大正九年（一九二〇）九月二日、三十七歳の短い生涯を閉じた。

彼の墓は下関市神田町の市営墓地にあり、その墓碑銘は、孤剣が思想の先達として慕った堺枯川が筆をとった。

「孤剣君 本姓ハ福田 実名ハ義三 下ノ関ノ産出シタル最大最初ノ社会主義者 熱血熱涙能文雄弁 大正九年九月二日没ス年三十八 十三回忌ニ際シテ此ノ墓ヲ建ツ」 堺 利彦識  
孤剣の鮮やかな軌跡を謳っている。

（文・野村忠司）



社会主義伝道行商  
（左）孤剣（右）小田頼造

戦争を呪ふ

天の星、野べの百合にも平和の、色は満てるを、醜の戦よ。  
血の酒杯、舌つゝみ打つ醜人を、滅亡にこそふ天の火もがな。  
バイブルを血汐に染めて、十字架を、砲にかざらん宗教家はや。  
天も知れ、地も記すべし、此民は、人を屠りて人の道と云ふ。  
教會のうち、はやす悪魔の讚美歌よ、戦に勝てと捧ぐ祈祷よ。  
泣く聲を聞かずや。  
醜国の司人等よ、狐兎と、寡婦が血に泣く聲を聞かずや。  
戦ひの毒酒に酔へる人の子に、神の怒の鞭より来ね。

「週刊平民新聞」45号  
（一九〇四・九・一八）

山口孤剣 年譜

|             |     |                                                                                                                          |
|-------------|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 明治16（一八八三）年 | 八歳  | 4月19日、赤間関区豊前田町百二十番屋敷（現・下関市）に生まれる。父福田伊助、母チヨの三男、本名義三。<br>下関市立関西小学校入学。                                                      |
| 明治23（一八九一）年 | 一六歳 | 10月27日、山口中学校徳山分校から山口県立豊浦中学校に転入学。                                                                                         |
| 明治32（一八九九）年 | 一七歳 | 4月30日、豊浦中学校退学、上京して東京政治学校（松本君平主宰、神田キリスト教青年会館）に入学。松原岩五郎「最暗黒の東京」、横山源之助『日本の下層社会』等の著作に感動し、下谷万年町や四ッ谷鮫ヶ橋などの貧民街に入り、社会主義への傾斜を強める。 |
| 明治33（一九〇〇）年 | 一七歳 | 8月21日、祖母山口チヨ死亡のため、12月21日、山口家の養子となり、家督を継ぐ。                                                                                |
| 明治34（一九〇一）年 | 一八歳 | 12月、社会主義書籍の出版を目的とした「鉄鞭社」を組織し、『破帝国主義論』（付日露開戦論を駁す）を同社から刊行する。                                                               |
| 明治36（一九〇三）年 | 二〇歳 | 『平民新聞』紙上に活発な文筆活動を展開する。「余は如何にして社会主義者となりし乎」「社会主義の讚美歌」など。                                                                   |
| 明治37（一九〇四）年 | 二二歳 | 10月5日、小田頼造（佐波郡徳地町の人）とともに社会主義伝道行商に出発。                                                                                     |
| 明治38（一九〇五）年 | 二三歳 | 1月25日、約4か月かけた伝導行商、下関で終る。1月平民社社員となる。週刊『平民新聞』が政府の弾圧により廃刊。『直言』によって「万国の労働者団結せよ」など社会主義の文章を発表し続ける。                             |
| 明治39（一九〇六）年 | 二四歳 | 3月15日、「凶徒聚集事件」で拘引投獄される。6月21日、保釈出獄するまで、「獄中消息」など文筆活動を続ける。                                                                  |
| 明治40（一九〇七）年 | 二五歳 | 6月、幸徳秋水の帰国（米国より）を迎えての日本社会党結成に参画する。                                                                                       |
| 明治41（一九〇八）年 | 二六歳 | 4月、新聞条例違反で入獄（「貧富の戦争」「新兵諸君に与ふ」「父母を蹴れ」の三作品に対する起訴、有罪のため服役）                                                                  |
| 明治42（一九〇九）年 | 二七歳 | 短歌「獄中作」を東京社会新聞に発表。7月4日「凶徒聚集事件」の保釈を取り消され再入獄。12月、出獄。                                                                       |
| 明治43（一九一〇）年 | 二八歳 | 週刊サンデー記者となる。この年5月、大逆事件の検挙始まる。                                                                                            |
| 明治44（一九一一）年 | 二八歳 | 1月『明治百傑伝』出版。幸徳秋水ら大逆事件で刑死。                                                                                                |
| 大正2（一九一三）年  | 三〇歳 | 7月16日、吉村コウと結婚。大阪朝日新聞の記者となる。                                                                                              |
| 大正8（一九一九）年  | 三六歳 | 10月「日本社会主義運動史」を書く。（『改造』）                                                                                                 |
| 大正9（一九二〇）年  | 三七歳 | 4月『階級闘争史論』（大鑑閣）出版。<br>7月、病氣療養のため、妻コウの実家宇和島へ移る。出版に際し東京駅頭で堺利彦（枯川）の「社会主義同盟」に加盟。<br>9月2日、午前9時40分、腎臓病で没す。                     |

堺枯川が筆を執った碑銘（孤剣の墓）が下関市神田町市営墓地に建立。